

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第卷一十五第

月七年五十和昭

論叢

民族主義と帝國主義……………文學博士 高田保馬
實踐學としての日本經濟學……………經濟學博士 谷口吉彦

時論

日本國と蘭領東印度……………法學博士 末廣重雄

研究

江戸時代の國產獎勵……………經濟學士 堀江保藏
理想型理論の方法的意識……………經濟學士 出口勇藏
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

說苑

北支滿洲損害保險市場……………經濟學士 佐波宣平
ハンセンの人口政策に就いて……………經濟學士 青盛和雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

經濟論叢

第五十一卷 第一號 (通卷第百零九號) 昭和十五年七月發行

論叢

民族主義と帝國主義

高田保馬

今日帝國主義は資本主義の最後の段階であり、従つて資本主義の特殊なる一形態に外ならぬとする見解がひろく行はれてゐる。けれどもこれは事態の真相に徹せざる見方である。帝國主義は資本主義の一形態であるよりもむしろ其立對物であると考えべきである。それはむしろ民族主義と密接なる類縁をもつ。この點を考察して見よう。

まづ此分析に入るに先だちて、帝國主義とは何であるかを考へよう。帝國主義の主體としては國家が考へらる

べきである。勿論一帝王、又は英雄の意志又は一民族の情熱に従つて國家が帝國主義的行動に出づることありとしても、その主體として見らるべきものは國家でありその王者又は野心ある政治家でも又その民族でもない。けれども此主體たる國家が如何なる態度をとるときに帝國主義的であるか。それは勢力を外部に伸張しようとすることを求むるときに帝國主義的であるといふ。例へば國內の資源を開發し、内部の統一を強化し、民衆の生活を高むるといふが如き、所謂民衆の福利秩序の整頓を策するにしても、それは帝國主義的であると考へられぬ。いはゞ國家活動が内包的に強化し國家勢力が内部に伸張するにしても、これは帝國主義の中に數へられぬ。一國家が其領土の擴張を求むるか、又は其主權の及ぶべき範圍の擴大を求むるのでなくとも、其政治的勢力の範圍の擴大を求むるとき、そこに帝國主義的活動があるといふ。外部に向つて單に經濟的交渉を強め又は自己の文化を宣布することありとしても、そのこと自體は決して帝國主義といはるるのではない。それは帝國主義の手段であり、又は副次的現象ではあるにしても帝國主義のものではない。國家が其國家としての活動又は勢力を外部に伸張せしむるときに、従つて政治的に擴充を求むるときにそれは帝國主義的であるといふ。國家がつねに地緣的空間的結合である點からいふも帝國主義はつねに此空間の擴大としてあらはれる。

帝國主義は一の民族又は國民の際限なき擴充の要求に外ならぬといふ説明の仕方がある。此説明については帝國主義の主體を如何なるものと見るかについて一の問題があるであらう。けれどもそれを措いて考ふるも、その際限なき擴充の要求は之を潛勢的可能的なる姿に於て考へることが出来るし、その現勢的發動的なる姿に於て考へることが出来る。潛勢的には如何なる民族といへども此要求をもたぬことはない。如何に抑壓せられたる民族

にあつても勢力意志は其民族的自我の本質に屬することである。ところが帝國主義を弱小の民族又は國家に認めぬといふことは、その要求が單に潜在的であるからに止まる。帝國主義にあつては此擴充の要求が現實的であり擴充の活動となつて行はれつゝあることが意味せられる。而も此擴充が國家の空間的擴充であることは前に述べたところである。謂ふに國家は其權力の及ぶ地域を領土として其構成要素として含む。これは一面國家の考察からの見方であるが、更に根本的には國家的自我の立場に立つて考ふるときの成員の見方でもある。これによると領土乃至國權の及ぶ地域は國家の身體の一部分として考へられる。従つてその擴充は國家身體の擴充であるかの意識を以て迎へられる。それゆゑに、此空間的擴充を如何なる國家といへども要求せざるものはない。然るに拘はらず、其勢力微弱にして動もすれば外部の壓力に屈服しようとし、僅に其獨立を保持してゐるが如き場合にあつては、そこに帝國主義があるとはいはぬ。そこで現實に於て、いかなる程度まで擴充を求めようとするときに帝國主義があるといふか。これには二の考方があり得る。その一は、國家又は民族の自然的なる限界の存することを認める。それをこえて擴充しようといふ要求をもつときに、そこに現勢的なる擴充の要求があり、帝國主義が支配すると見る。けれども、自然の限界といふものの何であるかは之を客觀的に判定する標準がないであらう。たゞそれはイデオロギイ的にのみ定まるにちがひない。そこで次の考方がある。國家の限界には一の歴史的名がある。此歴史的限界を恢復しようとする要求は自然の要求であり、その限界は自然の限界である。そこまでの擴充は帝國主義的のものではない。けれどもかう見るときには、舊き歴史をもつ大帝國の後をうけたる國家例へば伊太利の如きは全歐洲を併合しようとするもなほ帝國主義的ではないといふことになる。そこで一

の國家が帝國主義的であるか否かは、現状から出發して考ふる外はない。それが現に他國の保護干涉の下に立たず、十分なる獨立を保持してゐる場合に於て、其國權の及ぶ範圍を外部に向つて伸長しようとするときに、そこに帝國主義が支配してゐるといふべきであらう。自然の境界、歴史的なる境界といふが如き概念はある一國の方針が自己擴充的であつても帝國主義的ではないといふ自己辯護の資料とはなり得るであらうが、帝國主義の客觀的分析に用ふべき概念であるとは考へられぬ。なほ自然的、歴史的なる境界の外に存立の爲に必要な境界いはゞ生命線の概念が考へられ、帝國主義といふのはそれをこえたる擴充であるといふ。けれどもこれとても畢竟イデオロギイのもの、何れの國家といへどもかゝる理由を以て自ら帝國主義的ならずといひながら其版圖を擴張しうるであらう。

二

帝國主義の擴充の要求は常に二の方向に向ふ。一方に於てそれは對等の文化と富とをもつところの諸國に向けられる。これは一方に於て帝國主義國相互間に於ける擴充要求の衝突従つて摩擦を來す。普佛戰爭歐洲大戰といふが如きは、その代表的なる例である。たゞ此種の衝突いはゞ強國間の衝突は相手に對して勝利を得るが爲従つて相手の上に又は其國土の一部分の上に權力を及ぼすが爲によりも、寧ろ其所有する植民地の爭奪の爲に行はることが多い。文明國中の小國に對して壓迫を加へ、之を吸収しようとする現象は最近に於て顯著になつて來た。これは皆獨逸の態度に關する。かつて歐洲の小國はすべて各列強の勢力均衡の蔭にかくれて其政治的獨立と經濟的繁榮とを享受してゐたのであるが、最近獨逸ノ聯の武力充實と共に此均衡が破るるやそれらは附近の小國

の蠶食を開始し、世界に全く新なる事態を作り出し出してゐる。これは帝國主義の作用してゆく一の新しき方向たるを失はぬであらう。けれどもその本來の方向は抵抗の更に弱きもの、即ち後進民族の上に及ぶ。そこに政治的勢力が加へらるとともに、其資源の利用、市場の開拓、資本の輸出、軍事的利用等が行はれ所謂植民的活動の對象とせられる。若しそれの上にかゝる活動が十分に行はれ得ざる所ありとすれば一に、他の列強からの反抗それとの摩擦の回避のゆゑに外ならぬ。近代に於ける帝國主義を見るに、その植民地獲得乃至擴張運動のみが格別に目立つのは國家の低級社會の地域への進出である。それゆゑ帝國主義が一に、經濟的利益を求めて植民地を求むる方針であるが如くに考へらるるけれども、それはたゞ結果だけから見たる錯覺に外ならず、帝國主義は何よりも歐羅巴自體に於ける本國の伸張を目ざす。たゞそれが勢力の均衡の爲にあらはれなかつたに過ぎぬ。最近に於ける獨逸の進出はすべてこのことを示してゐる。

さて此の如くに見て來ると、帝國主義は少くも近代に於て、民族主義の一延長に外ならず、民族の自己擴充の要求がある段階乃至程度をこゆるところに、それは帝國主義の形をとる。勿論此帝國主義的方针がどこまで強めらるるかに關しては、或は王者乃至武將の功名心、ある支配的政治家や政黨の政策等が種々なる決定事情として作用するであらう。けれどもこれらの變化動搖にも拘はらず、民族の自己擴充の要求が常に根柢に作用してゐるがゆゑに、一の國家は其外部への伸張が可能である限り之を實現しようとする。それゆゑに例へば、獨逸が最近に於てチエツコを併せポオランドに進駐し、バルカンに懐柔の手を延ばすに及び、自ら大地域主義又は大空閑秩序を稱ふるに至つたのを見て、それは民族主義をすてて新なる方針に向へりとするのは、事實とイデオロギイと

を混同するものであり、辯解を事實と見るものである。かゝる大地域を求めようとするのは、帝國主義の形態をとるところの民族主義の必然的段階である。たゞ此伸展を辯護する爲に、地域主義の名稱を用ふるに外ならず、如何なる衣裳を用ふるに拘はらず、民族主義の本體に於ては何の變化もない。

今日の帝國主義が民族主義の一延長であることは争ひ難いにしても、逆に民族主義が帝國主義としてのみ作用するといひがたいこと勿論である。民族主義は其民族の置かれてゐる政治的状況に應じて種々なる形態をとる。今まで各の文明國を眼中に置いて考へてきたが、廣く他の國家又は民族をも考慮の中に入れよう。ヴェルサイユ條約は所謂民族自決主義をとり、バルカン北歐に多數の小國家を作り上げた。これは政治家の意圖、國際勢力均衡の事情によつて作り上げられたやうであるが、其實各の民族の民族主義的要望に應へたるものと見るべきである。而してこれらの民族は別に文化の程度に於て低級であるのでもなく、經濟的に絞取せられてゐるのでもなく、たゞ民族の政治的自律を求めたに過ぎぬといふことになる。いはゞ少數の民族が大國の政治的統一の中から分れて獨立を實現せしめたることとなる。たゞかゝる少數民族が今後どこまで其自律をつゞけ得るや、今日スカンデナヴィアの各國さへ其獨立を失はんとしつゝある場合に於て、結末や知るべきではなからうか。また民族主義は植民地乃至半植民地的國家に於て注目すべき形態をとる。明治維新前後に於ける日本の民族主義はその民族國家の完全なる獨立を保持して失はざらむとする要求であつた。今日の支那に於ける民族主義はあくまで民族國家の完成と獨立の回復とを旨ざしてゐる。印度に於ける民族主義に至つてはかゝる目標までの距離が極めて遠いにしても、やはり同様のことを求めてゐる。日本は今やこの段階から遙に異なる段階に進入したのであるが、こ

これらの後進諸國に於ける民族主義はこの意味に於て列強の帝國主義的民族主義よりも遅れてゐる。一はいふまでもなく物質文化従つて軍事的裝備の點に於て遅れてゐる。次に歐洲列強の民族國家がつとに完成し、それが帝國主義的なる侵略を進むるに當り、此侵略の相手となつて居り、従つて其壓迫を排除しなければならぬ狀況に置かれてゐる。いはゞ此二重の遅れによつて、その民族國家の實現は極めて困難なる情勢にある。このほかなほ弱小なる有色人種の諸集團にあつては、白人の壓迫に對抗して立上らうとする要求、いはゞ一種の民族主義が芽生えつゝあるにしても、それは目標に到達することの餘りに困難なるがために、なほ未だ明確なる運動の形をとるに至らぬ。要するに、民族主義そのものは民族の集團的自我の勢力要求である。いはゞ民族的勢力意志である。それは種々なるイデオロギイを以て粉飾せらるるであらう。或は民族の自治又は自決の自由を以て、或は民族が一國家をなすといふことの自ら正義に合するといふ主張を以て、或は自國の優越せる文化を弘布することの人類の向上にとつて必要なりといふ理由を以て。而して最近の獨逸の如きは一定の秩序を國家をこえたる空間に互つて確立することの必要を力説してゐる。要するに、これらの觀念乃至主張はすべて所謂派生體に屬することであり、それがたえず變化するに拘はらず、所謂基體としての民族主義は常に脈々として持續する。

三

さて帝國主義は完全に獨立する一國勢力の現状をこえたる外部的擴充の努力であると解するにしても、それは意識的計畫的なることを要し、従つて武力を背後にもつことを意味してゐる。單純にある宗教的信念の弘通ある政治的主張の宣布、又はひろく一定の民族文化の傳播をそれ自體として目ざすことありとしても、それが直ちに

帝國主義であるとはいはれ得ないであらう。現實の帝國主義がつねに其補助工作として、又はその正體を蔽ひかくす方便としてこれらの努力を缺くことがないにしても、それは自ら別の問題である。かゝる文化的工作は必ずや、政治的優越の地位を得せしめるであらうし、之を得たるものはその利用を忘れず、遂に自ら帝國主義的行動に入る。今日のソ聯の如き、當初の共產主義による世界革命の宣傳が主義のためであつたとしても、今日に於ては全く政治的抵抗の弱小なる地域を併呑しようとする帝國主義以外の何物であるとも思はれぬ。

勿論かくの如く規定せられたる帝國主義は極めて形式的のものであり、従つてそれは古き時代の國家にも亦共通なるものである。此帝國主義が時代の差異、社會的組織の差異に應じて種々なる色彩をもち、従つて種々なる形態をもつ。近代に於ける帝國主義の特有なる色彩の一として數ふべきことは、一方に於てそれが資本主義と結び、勢力の利用の仕方がつねに經濟的であり、従つて資本の進出といふ外觀をとることである。他方に於て、それが一帝王又は一英雄の野心と強制とに基くよりも、むしろ民族成員の自發的なる要求、別して一定の民族的理想の追求に基くといふことである。一の事情は近代帝國主義をして動もすれば資本主義の一形態又は一段階であるかに思はしめるとともに、他の事情は各の帝國主義をして極めて持續的にして幾世紀の久しきに亙り一定の方向に向つて進行せしむる所以をなす。此後の點を十分に理解する爲には、近代に於ける民族主義の如何なる一面が帝國主義を基礎づけるかといふことの分析を必要とする。

茲に立ちかへつて民族主義と帝國主義との關係を考へ民族主義の如何なる一面が帝國主義と結ぶかを明にしよ。民族主義は前にも述べたるが如く、民族的自我の擴充の要求であり、民族を主體とする勢力の欲望の結果そ

のものに外ならぬ。それは一面に於て消極的である。民族は其統一と自強とを求める。例へば近代の民族國家の形成に際して、同一の民族に屬するものは自ら單一の國家をなして生活せむことを欲し、又其文化を高め國力を増進せんことを求める。これだけの要求からは國家が現在の地域を固守するか又は民族自決的に固有の一民族のみを一國家に包擁するに止まり、空間的に其地域をこえて伸張するといふことはない。かくてそこに帝國主義といふものは行はれぬ。けれども、民族主義は他面に於て積極的である。民族國家の完成を以て民族主義は其進行を停止するものではない。更に進みて外部への政治的進展を求める。これには勿論二の場合がある。その一は弱小の民族に向ふものである。これは資本主義以前の時期にあつては征服又は威壓、併合又は從屬といふ軍事政治的形式をとり納貢といふ經濟的過程を伴つたのであるが、近代に入つて多くは植民的活動が行はれ、従つて屬領の獲得となることもあるが、植民地分割の愈々困難となるに及び、單に勢力範圍を伸張しそこに市場を開拓し、投資を求むるに止まる。數多の國家が同一の地域に於て同一のかゝる活動に出づるときに、それは共同的半植民地形態をとり、所謂門戸開放の原則がそこに支配する。要するに、資本主義國家の後進民族に對する民族主義は此意味に於て一の積極的形態をとり、帝國主義として作用する。他の一は資本主義國家相互間に關するものである。民族國家は更に進みて其勢力要求のために、他の民族國家の上に攻勢に出で、武力又は財力、其他の外交的手段によつて、植民地の爭奪を行ひ、又は其境界そのものの改訂を求める。又は等しく資本主義國家中に於ける弱小なるものとの同盟協定等によつてその對外的地位を強化しようと力める。此意味に於て近代の民族國家は其確立完成の段階をこゆるや、皆必然的に帝國主義の段階に入れるものといふことが出来るであらう。勿論そこには

屢ミビスマルク、ヒツトラ、ムソリニといふが如きある勢力ある人物の活躍が目立ち、やゝもすれば國家がこれらの人物の意志に従つてのみ動くが如くに見え、そこに民族主義の作用をみとめがたきかにも考へられよう。けれども、表面と事態の真相とは自らことなるところがある。彼等によつて率ひらるる民族が其民族主義の要求に燃えたるが故に、與へられたる政策を支持し、其指揮に従つて全力を捧ぐるのである。これらの人物の仕事は、自ら積極的なる方向に動かうとする民族主義に明確なる方向を與へて、之を帝國主義化することにある。

古き帝國主義にあつては、個人従つて國家の成員が一定の支配的人物に向つて獻身的態度に出で、それに從屬して一體をなす。支配者は自己の勢力要求に動かされて國家の外部的伸張を求める。社會的に個人の解放の行はれざる場合に於ける帝國主義はそれが民族的團結を地盤として行はるゝ場合にあつても、個人的、英雄的色彩の下に蔽はれてゐる。近代の帝國主義にあつては、如何に指導者の人物が表面に浮び出ることがあつても、國家の帝國主義的活動が常にわれら民族の仕事として要求として行はれる。それとともに、國家は其獲得するところの地位又は勢力を別に支配者自身の爲に利用することなく、民族別してその中の勢力ある個人（従つて資本家）の利益の爲に利用することを忘れない。

四

此點に於ける差異は如何ともあれ、民族主義は帝國主義の地盤である。民族主義を以て民族の勢力擴充の要求であるとなすときに、それは近代の民族主義に於けるが如く意識的反省的のもの従つて言説と宣傳を伴ふものもあらうし、又はかつての時代に於けるその如く無意識的に従つて思想的内容をなすこともなく、民族生活の中

に盲目的に内在する要求として作用することもあるであらう。又は其中間の形に於て民族の生活を支配することもあるであらう。けれども何れかの形に於ける民族主義をぬきにして帝國主義の榮ゆる地盤はない。帝國主義はもとより一國家の無際限なる外部擴充の要求であるにしても、單なる帝王の強力なる意志、又は獨裁政治家の野心のみによつて成立し作用するものではない。これらが表面に作用する場合にあつても、其根柢に民族の要求があり之を支持するがゆゑに現實の勢力たり得る。一の國家は必ずしも單一の民族より成らぬ。けれどもその國家の權力を支持する中心たる民族の結束があり、國家の伸展を以て其民族的自我の擴充として意識する。その他の諸民族又は諸民族的分子はそれと協力する以外、國家成員としての義務を果し得なくなつてゐる。かくて民族主義の支援を離れて帝國主義の活動する餘地はない。それとともに、民族主義はその積極的なる自己擴充の段階に達するに及び、必ず帝國主義の形をとらざるを得ぬ。

勢力の要求いはゞ勢力意志はすべての個人を動かさうとする。けれども優越の實現せられ得る限りに於てのみ現に個人を動かす。然らざる場合に於ては殆ど意識の中に上らうとせず、潜在的なる傾向として終る。優越のある程度まで實現せられうる見込はあるにしても、一定時期に於て立てたる豫定との間にくひちがひあるときには苦悶を感じるか消極的に勢力意志そのものを輕視する態度に出で、英雄首を回せば神仙となる。而もこれまた勢力意志の一の表現に外ならぬ。ところが一たび國家が成立すると、その集團的自我がまたそれ自體の勢力を追求する。此國家を支持する意志乃至要求が一定の民族に存する限り、此國家的勢力意志は同時にその民族の勢力意志であり、國家内の他の民族といへども、その國家の統制の下に立つ限り、國家的勢力意志の支持者として

立つ。而して勢力意志の本質として無際限の擴充を求むるものである以上は、帝國主義がつねに如何なる國家にも内在せるもの、而して國家を形成し又は支持する限りに於て、民族主義にも内在するものといはざるを得ぬ。

いはゞ民族主義は國家といふ機構を通じて作用する限り、本來潜在的なる帝國主義である。たゞそれがどこまで現實の帝國主義として作用するかは種々なる條件に依存する。此條件としてあくべきものは何よりも其國家の對外的地位である。外部に向つて、その擴充を實現する見込ありや如何。この見込のあるときにはじめて帝國主義といふ積極的行動に出で得る。更にまた、指導的地位にたつものゝ意志によつて左右せられる。帝王又は偉大なる政治家、軍人の勢力意志によつて指導せられ、進みて強制せらるゝときに、國家的自我の飛躍的擴充が要求せられる。而して帝國主義的行動は恰もこれらの指導的人物の個人意志に基くかの姿に於て進行する。これは其實其根柢に存する民族主義がそれによつて點火せられ、國民が自發的にその方向に向つて爆發するからに外ならぬ。

此點からいへば國家は野獸なりといふ表現の餘りに極端であるにはせよ、其勢力意志はつねに無際限なる擴充を求むることを疑ひ難い。かゝる一面からいふならば、「世界帝國か没落か」といふのは決して現代の獨逸のみではなくヒトラーのみではない。多くの國家、多くの民族主義は根本に於てさう見られうる一面をもつといふものがあつても、全く無稽の言葉と云ひ去り得ないであらう。要するに民族主義は民族的自我そのものゝ本質である。而も民族的自我の擴充の要求に外ならぬ。無際限なる擴充の要求である帝國主義は、民族主義がすべての障礙に妨げられず、惜しみなく自己を展開したる姿であるといはねばならぬ。

五

ところで此民族主義、ひいてはその現實に於てとるところの形態、即ち帝國主義が世界の歴史の動きの上に如何なる影響をもたらしてゐるか。これが考察せらるべき問題である。而してこれに對する私の答解としてはたゞ次のことを述べよう。ナポレオンは帝國主義は其大食によつて亡ぶといつたと傳へられる。それは過大の地域を征服し之を其版圖又は勢力範圍とするとき統治の困難の爲に行きつまるといふことをさしたのであらう。けれどもかゝる意味に於てならば大食なるも亡び、大食ならざるも亦衰える。即ち其領土又は勢力の及ぶ範圍がそれほどに廣大ならず、統治の組織が十分に確立し得られたとしても、やはり永久の繁榮と強盛とを約束せられ得ない。これは如何なる事情に負ふか。結局帝國主義が十分に其目標に近づくことになれば、四周の從屬民族から納貢又は交易の形に於て物資を集め、その生活を高むるとともに物質的幸福を追求する。このことが生活の仕方を功利的ならしめ又個人主義的ならしめる。別して外部にその憂慮すべき仇敵又は競争者の存在せざることが此傾向を助長するとともに内部の結束を弛緩せしめる。かくて如何なる國家の帝國主義といへども、その覇權を永久に確立することは出来ぬ。勢力の絶頂に到達することはやがて下降のはじめである。こゝに所謂文化循環説の主張を思ひ合す必要があると考へられる。

一の生物有機體には少壯老の段階があり、生れたるものはこれらの段階を經過して必然に死滅する。民族の生命をまたこれとの類比に於て考へようとする立場がある。それによれば、各の民族又は一の統一的なる文化をもつ民族の集團は一の有機體とも見るべきものである。従つて發達の一定段階を經過して遂に死滅する。かくて古

來繼起したる幾つかの文化は皆それ／＼少壯老の段階、いはゞ古代中世近代の段階を辿つて來た。各文化の各段階は特有のものでありながらまた同時に同一段階と認めらるべき共通の性質をもつてゐる。希臘文化には希臘文化の各段階があり、羅馬文化にも又その各段階がある。而して現に支配する歐洲文明についても亦さうである。此見解については次の如くに考へ得るであらう。民族又は民族の文化が一の有機體をなすといふのは論證を経ることなき、一の獨斷である。従つてそれ自體として學問的意味をもつものではない。たゞそれが假設としてどれだけの意義をもつかは、其結論がどれだけ事實の經過を説明し得るかに依存するであらう。ところで希臘にも、羅馬にも近代歐羅巴のそれと同様な國民經濟があり、資本主義があつたといふけれども、大體技術の段階に於て異なり、奴隸制度をもつ又はもたずといふ如く社會組織に於て根本的差異があり、信用や資本について根柢から性質を異にする幾つかの文化が、共に同一の段階を形成するとは考へられぬことである。従つて各文化が同様な段階を繰返すといふ文化循環説は極めて非科學的なる一の構想以上のものではない。加之、其老衰死滅の何故であるかについては十分なる説明を要すると思はるゝけれども、かゝる假説にあつては、それが十分意識的に加へられてゐるとも考へられぬ、たゞ若干の人口學者の側に於て民族文化の老衰としてゝなく、民族の生物學的側面立入つていへば遺傳的因子の老衰として考へられこゝる。而して此老衰即ち年代の經過につれて其力を失ふことが人口増加の停滞又は減少を來し、遂に死滅するといふ(デミ)。これと對比して興味ある見方は支那民族の生活能力に關する。それにあつては、約八百年を隔てゝつねに新しき民族の血が流入し、その混和によつて民族の生命は新しさをつゞけてゐるといふ。さてかゝる種類の意見といへども、年月の經過と共に何故に勢力の

減少老衰を來すかといふことが説明せられねばならぬであらう。要するに文化そのものゝ老衰を説くにせよ、民族の老衰を説くにせよ、それらは未だ論證を経たる科學的命題として確立せられたるものとは考へられぬ。

六

各の民族の文化は決してそれ〴〵に獨立したる、而して發展の特有なる形態をもつところの有機體に比せらるべきものとは考へられぬ。各の文化が各の植物の如く、すべての發展の形態を其内部に藏してゐるものならば、文化の相互的影響文化の交流による同化といふが如き事實も如何にしてありうるか。なるほど各の文化を作り上げたる民族はそれ〴〵血液を異にし地理的氣候的條件を異にする。従つて假に同一の文化内容を與へられたるものとして出發するにしても歴史の過程の間に成立する所の文化が各特異性をもつであらうことも亦理解せられる。かゝる個性を否定しがたいにはせよ、模倣受容強制等の作用はたえず行はれ、同化の傾向は常に支配しつゝある。各文化がすでに遺傳質によりて豫め定められたる形態を展開してゆくのは、全く趣を異にするはずである。すでに各の文化をもつ民族を一有機體に比すべからずとするならば、其興隆、衰亡については理解しうべき仕方にて因果的なる説明が與へられねばならぬ。それは既に茲に述べたるが如く、一定の民族が其帝國主義的努力によつて勢力即ち權力と富とを集積したる結果として、其存續が困難になる過程の中に求めらるべきであらう。それゆゑに、民族の興亡はその民族の支持する文化の内容が如何なる段階のものであるときにも起り得るはずである。文化そのものゝ發達には少くも一面に於て連續的前進的不可逆的なるものがある、技術經濟科學といふが如き、合理的自然征服的方面はすべてこれに當る。これは屢々文明と稱せらるゝものである。而してそれ以

外の文化といへども、此所謂文明的方面からの制約をうけ其要素によつて滲透せられてゐるがゆゑに、文化は之を全面的に見て不斷に上昇しつゞけて來たといひ得る。勿論ある時期に於て若干の後退又は斷續があるにしてもそれは自ら別の問題である。従つて一々の民族文化の完全なる反覆、又は少くも同様なる壯老の段階の反覆を考へる餘地はない。たゞ若干の民族の帝國主義的進展の結果、衰亡の生ずるところには極めて相似たる社會的情勢があるとは認められる。それは勢力の過剩集積から來る民族結束の崩壞作用いはゞ民族生活の弛緩作用である。

人は動もすれば羅馬の滅亡と近代歐洲の凋落との間に全く平行的なる事象を認め、そこに完全なる文化循環を見ようとする。此見解は更にひろげられて或は希臘の没落又はそれ以前の文化民族の滅亡にまで及ぼされようとする。けれども茲に前の二者のみに限つて述べるにしても、そこに認められ得べきものはたゞ社會的側面に於ける平行であつて全文化に於けるそれではない。勢力の過剩集積は自ら民族的結束を弛緩せしめる。云はゞ利益社會的態度が過度に進行する、個人は自己の利益享樂、別して勢力の獲得享受に専念して民族の爲に犠牲となることを喜ばぬ。人口の増加が停止し又は其減少がはじまる、時としては戦争による莫大の人口喪失がこれに助勢する。民族は自ら其對外的勢力を失ふに至るであらうし、時としては内部の統一さへも困難になる。かくて民族の生命は其崩壞と凋落とに向つて進む。従つて民族が人口學的に衰亡することありとしても、それは遺傳質の老衰によつて説明せらるべきものでもなく、又民族を一有機體視することによつて、其老衰の比喻から説明せらるべきものでもなからう。それらの主張は、科學的なる論證によつて支持せられうるものとは考へられぬ。而してこの文明の凋落に於て繰返さるゝものは、民族結束の弛緩、利益社會化の側面であつて、全文化に互るものでないことはいふまでもない。何となれば、文化を支持したる民族は凋落し滅亡するとしても、その文化自體は客觀的

なる生命をもちつゞける（アルフレト・ウエエバア）。それは新興の民族によつて吸収せられ、繼承せられ、發展せしめられる。文化は一面から見ると勢力の餘剰の結晶であり、そこに於ける開花である。取り代れる民族は勢力獲得の要求に於てなほ熾烈であり、自然との争闘に於て得たる野性を未だ喪失せざるところの若き、然れども文化に於て必ずしも高からざる民族である。凋落したる民族の文化は此若き民族に繼承せられ、そこに成長し發展をとげる。勿論そこに受容せられたる文化がそのまま繰返さるゝことはない。また一直線的に、漸次の段階をたどつて上昇するといふこともないであらう。けれども理知の方面、従つて不可逆的なる方面に於ては必然的に凋落したる民族の高き文化が吸収せられる。而して情意の方面に於ける文化、いはゞ精神的なる文化の方面にあつても、それが理知、技術、科學によつて影響せらるる限りに於て、なほ吸収せられざるを得ないであらう。それとともに、これらの精神的方面に於ける各の完成せられたる個性の文化、例へば一定の宗祖をもつところの宗教、個性をもつ哲學又は藝術といふが如きものはそれ／＼に、新しき民族に於ける有能者の魂によびかけそこに影響を植ゑつけるであらうし、又民衆の中にそのまゝ享受鑑賞せらるゝであらう。文化は民族とともに凋落することなく繼承せられて新なる發展をとげる。此發展が自ら他の文化との結合であること、新しき民族的環境に對する適應を意味することはいふまでもない。此意味に於て、文化は民族の生命に従つて循環せず、それは民族の興亡に拘はらず成長をつゞけてゆくであらう。（昭和十五年六月上旬）

帝國主義の何であるかについて、今日定説のあるわけではない。たゞ私は本文に於て國家の外部的伸長の努力であると述べた。國家の努力であるといふことは國家が對外的にはつねに武力の主體であることから、背後に武力を擁するところの努力であることを意味する。それとともに此努力の動機について問ふところはない。それはある學者（たとへばシユムペエタア）のいふが如く、無目的のものであらうとも、マルキシズムの考ふるが如く、經濟的目的のゆゑであらうとも、それは選ぶところなしと

思ふ。なほ民族國家の確立以後について見ると、その外部への進展はつねに他の民族を勢力の下にとり入ることを意味する。いはば數多の民族を包容するところの所謂帝國の形成をめざすものともいふべきである。けれども、帝國主義の何であるかを考ふるに當つては他民族の克服といふ點に重きを置き、語原の意義に忠實であることは必要でないであらう。要は國家の對外的態度にあると思はれる。

帝國主義の意義についてはハムブアゲンの諸論文最も詳細を極む。Hastagen, *Imperialismus als Begriff, Weltwirtschaftliches Archiv*, 15 Band, 1919; ditto, *Marxismus u. Imperialismus, Jahrbücher für Nationalökonomie u. Statistik*, 1919; ditto, *Zur Deutung des Imperialismus, Weltwirtschaftliches Archiv*, 1927. キェリツ・ホムは北米社會科學百科辭典に於て「帝國主義を他民族を支配する國家即ち帝國への努力と見てゐる。ハムブアゲンの擧ぐるところによると帝國主義は多くの學者によつて、一民族の支配を擴張せんとする努力、民族又は權力者の世界支配への要望などに見られてゐる。而して帝國主義は書かれたる歴史そのものと共に古いところの結論を避け難いとも述べてゐる (Hastagen, *Imperialismus als Begriff*, S. 163)。ハムの帝國主義論が帝國主義を資本主義の最後の段階とのみ見るかの如き誤れる解釋がひろく傳へられてゐるやうであるが、此見解と對比するときに興味が深い。カブソン、ヒルファディング、レニンの一聯の經濟的帝國主義論についてはかつて批評を加へたからこゝには論及しない。帝國主義の定義として恐らく最も有名なるもの、而して學問的に見て最も注目すべきものはシムムエタマのそれである (Joseph Schumpeter, *Zur Soziologie der Imperialismen, Archiv für Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik*, Vol. XLVI, No. 1, 1918)。その定義を茲に引用しよう。Imperialismus ist die objektive Disposition eines Staates zu gewaltsamer Expansion ohne angegebene Grenze. これに對してハムブアゲンは次の如くに述べてゐる。(1)最後の部分「無制限」といふ文句は不用である。それは「無目的なる擴充」といふことの當然の結果に外ならぬ。(2)強力的にといふ形容詞は不用である。さうでないならば大戦前に論議せられたところの所謂「文化帝國主義」がすべて除外せらるることになる。(3)此定義に於ける特有の點は無目的にといふことに存する。擴充を自己目的として追求する、攻撃そのことのために攻撃的態度に出づるのが帝國主義の特徴である。ハムブアゲン自身は更に自給の努力をも加へて此定義を補充しようとしてゐる。實にシムムエタマの此定義に特色あらしむるものは此「無目的」の一語である (a. O. S. 166-175)。ウインムロホはシムムエタマの帝國主義論を、今までの學說から區別して、社會學的理論と云つてゐるが、それが社會學的である所以は、經濟的目的によつて帝國主義を説明せざる點にあるとする。またこの無目的といふところの社會學的なる點が存するわけである。(Winslow, *Marxian, Liberal, and Sociological Theories of Imperialism, Journal of Political Economy*, Dec. 1931, p. 749.)